

## 巻頭エッセイ

# 越境・トランスナショナルリズム・多文化共生

人間文化研究所長

(むらい・ただまさ)

村井忠政

昨年三月に刊行を見た創刊号では、「宗教と共生」のテーマで特集を組んだところ、予想を上回る多数の先生方からの寄稿があり、好評であった。第二号では、グローバル化がもたらす「トランスナショナルリズム」と呼ばれる社会・文化現象に着目し、「越境・トランスナショナルリズム・多文化共生」を統一テーマとして、第一部「越境の文学」、第二部「外国人住民との共生」を小特集として組むことになった。

一九九〇年代半ば以降、欧米ではグローバル化した大規模な人の移動の研究、とりわけ移民の新しい移住形態を表す概念として「トランスナショナルリズム」という概念が注目されている。近年、日本でもトランスナショナルリズムの日本語訳として「越境」という言葉が普及し、人類学や社会学、国際関係論などの学界のみならず、メディアや文学などにおいても、今やごく普通に用いられるようになった。しかしながら、越境をめぐる議論は人や文化が国境を越えるという事実を強調するだけにとどまり、トランスナショナルリズム概念導入の契機となった、「国境を越えた、あるいは複数の国や地域にまたがった」新しい社会・文化現象という、この概念の本来の意味内容が必ずしも十分に理解されていないように思われる。

それではこの「トランスナショナルリズム」と呼ばれる新しい社会・文化現象とはいかなるものなのか。Schiller et al. (1992) は、トランスナショナルリズムについて論じた論文の冒頭で、「われわれが従来使ってきた移民の概念は、もはや時代遅れになっている」として、次のような大胆に踏み込んだ議論を展開する。「移民という言葉を聞くと、恒久的に故国から引き裂かれ、根こぎにされ、古

いパターンを投げ捨て、苦心惨憺新しい言葉と文化を身につけるといったイメージが喚起される。ところが今や、新しい種類の移民が台頭しつつあり、彼らはホスト社会と故国の両方にまたがるネットワークや、活動や、生活のパターンを有している。彼らの生活は国境をまたいでおり、二つの社会を一つの社会的領域 (social field) にしているのだ。」彼らに言わせると、このような新しい移民の実践的経験や意識を研究するためには、新しい分析道具が必要だというわけだ。

これまで「オールドカマー」に見られるように、日本社会への定住化がほぼ前提とされ、その上で同化や帰化の是非、あるいは民族文化や民族的アイデンティティを保持したままでの定住化の是非が議論されてきたが、近年において南米社会と日本を行き来する日系ブラジル人やペルー人などの南米日系人リピーターに代表されるようなトランスナショナルな存在が目だってきている。こうした現象は世界各国で見られる現象であり、このような現実の変化に対応して、分析上のパラダイムの方も、当該社会への同化や統合の是非を問題とする「統合パラダイム」に加えて、国境を越えた複数の社会関係のなかで生きる人々を捉える「トランスナショナル・パラダイム」を併用することが必要となってきている。

「ニューカマー」の外国人労働者の場合も、一時的な短期滞在か、そうでない場合は、やはり日本社会への定住化のいずれかが問題とされてきた。しかし、一九八〇年代終わり以降に急増した南米日系人においては、今日に至っても南米社会と日本社会とを行き来するリピーターが主流を占めている。「トランスナショナル・パラダイム」は、移民(外国人労働者)を国境を越えた複数の社会の関係のなかで捉えようとするものであり、個人の特定社会(地域)のみへの排他的な帰属を必ずしも前提にしない。

### 引用文献

Nina Glick Schiller, Linda Basch, and Cristina Blanc-Szanton. 1992. "Transnationalism: A New Analytic Framework for Understanding Migration," *Annals of the New York Academy of Sciences*, Volume 645, July 6.